



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第46号

URL=<http://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html>発行年月日: 2018年10月15日
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
Phone 0561-62-4111 ex.2498
FAX 0561-63-9308
E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第46号ニュースレター目次

- 第6期連続講座「2020年東京オリンピックに向けて! 1~4
ージェンダーの視点で見るスポーツ」報告
- 特別講演会「性的マイノリティのこれまでとこれから」報告・学生感想文 4~5
- エッセイ: 男性の家事・育児参画 6
- エッセイ: ユニークな子どもたちを探して 7
- 第36回定例セミナーのお知らせ 8

2018年6月から7月にかけて、第6期連続講座「2020年東京オリンピックに向けて!ージェンダーの視点で見るスポーツ」を開催しました。以下、その概要をご報告いたします。

第1回 6月1日(金)

星が丘キャンパス

「スポーツを社会学する」

講師 西山 哲郎さん
(関西大学人間健康学部教授)



コメンテーター
綾部 六郎さん
(本学非常勤講師)



スポーツは「平等」な競争を前提とした近代的な遊びである。公式戦で男女が対戦しないことで守られる「平等」とは何か。西山先生によれば、競技上の「平等」を考えると、スポーツをより深く理解することができるという。

日本にはスポーツ・ルールに関する誤解がある。スポーツのルールが何のためにあるのか(=スポーツ・ルールの目的)について、通常、①選手の安全を守る、②公平な競技を保障する、が挙げられるが、これらはスポーツ・ルールの手段であって、目的ではない。スポーツ・ルールの目的はゲームやスポーツを楽しむことにあり、スポーツは楽しむことが最終目的である。

ルールは「神聖」なものとして遵守すべきと考えられているが、本当にそうなのか。審判は絶対なのか、ルールはどのような時に変えるのか、という問題もある。その起源がイギリスあるいは紀元前のギリシアにあるとされるスポーツは、民主主義から生み出されている。もともとは相互のセルフ・ジャッジこそが理想とされ

た。日本ではルールが神聖視されがちであるが、ルールは本来、安全を守りながらプレイを面白くするためにある。水泳の背泳でのバサロ泳法に対する規制や、スキージャンプの板の長さの規制等、これまで日本人が活躍するとルールが変更されるとの誤解が囁かれているが、実際には一つの国の選手が勝利を独占するのはルールに偏りがあるからとされ、それを正すためにルールが変更されている。そこには自分達だけ勝つのは楽しくないという考えがある。

スポーツ・ルールとジェンダーとの関係については、公平な競技とハンディキャップの思想が参考になる。同じ競技でも男女で試合をしないのは、身体能力の差を考えて公平性を確保し、平等な競争を実現するためとされるが、これはレスリングや柔道競技の体重別クラスと同じなのか。1970年代のテニス界のキング夫人や90年代のナブラチロワの男性への挑戦はどう考えればいいのか。

スポーツにおけるセックスとジェンダーについて、

LGBTの存在やセメシヤ選手（南アフリカ代表）の例から示唆されるように、男女の違いははっきり分かれています。連続的なものと考えた方がいいのではないかと。

男性との対戦が認められない主な理由は「母体」の保護にあった。女性はスポーツをしてはいけないと考えられ、第2回近代オリンピック（1900年）の女性の競技は、公開競技扱いのテニスとゴルフのみであった。オリンピックから女性は排除され続けたが、1920年代の女性運動と共に、1924年には女性のみでのオリンピックが開催され女性参加の声が高まった。1928年のアムステルダム大会の女子800メートル走のゴール後の失神者続出以後、女子は中長距離競技から排除されてきたが、1967年のボストン・マラソンでは性別を明記せず参加した女性走者が完走した。

その後、オリンピックの女性競技は次第に増加した。1960年ローマ大会で800メートル競技、1984年ロサンゼルス大会でマラソン、1992年バルセロナ大会で柔道、2000年シドニー大会で重量挙げ、2004年アテネ大会でレスリング、2012年ロンドン大会でボクシング等が加わり、今日、女性はオリンピックのほぼ全ての競技に出場できるようになった。

クラス分けと公平性に関するひとまずの結論としては、女性だからという理由で競技をさせないことは現代では許されない。男性同士でも身体的優劣があるので、今後は体重別以外でも身長差や酸素運搬能力の差に応じてクラス分けする必要が生じるとすると、性別は多数あるクラス分けの一つともいえる。ドーピングの観点から酸素運搬能力を故意に高める不正は認められないが、生まれつき酸素運搬能力が高い人の存在は、競技の公平性から問題ないのであろうか。

こうした問題に参考になるのが、パラリンピック等

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所主催 第6期連続講座
2020年東京オリンピックに向けて！
ジェンダーの視点で見るスポーツ

第1回 スポーツを社会学する

▼6月1日（金）15:10～16:40 星が丘キャンパス1号館 15C教室
▼講師：西山哲郎先生（関西大学人間健康学部教授）
▼コメントーター：綾部六郎先生（名古屋短期大学助教、本学非常勤講師）
スポーツは平等な競争を前提とした近代的な遊びです。しかし、その平等へのこだわりは、突き詰めると争いと争いどころがあります。公式戦で男女が対戦しないことと守られる「平等」とは何か。競争上の平等を考えると、スポーツをより深く理解できます。

第2回 マスメディアを理解する～スポーツ報道を考えるために

▼6月22日（金）11:10～12:40 長久手キャンパス8号棟 824教室
▼講師：林香里先生（東京大学大学院情報学環教授）
▼コメントーター：藤井誠二先生（ノンフィクションライター、本学非常勤講師）
わたしたちが普段何気なく接する報道やニュースはどのようにつくり出されているのでしょうか。ニュース価値とは何でしょうか。わたしたちがどういった情報に取り囲まれているか、それはどういった固定観念や社会意識につながっているのか、皆で考えてみましょう。

第3回 アスリートの身体とジェンダー

▼7月2日（月）13:30～15:00 長久手キャンパス7号棟 7B2教室
▼講師：合場敏子先生（明治学院大学国際学部教授）
▼コメントーター：石河敦子先生（本学非常勤講師）
女性アスリートたちが、スポーツをする事で、どのような身体を獲得し、どのような意思を受け、一方、ジェンダー規範からどのような挑戦を受けているのかを明らかにし、身体的エンパワーメントについて考察します。

入場無料！どなたでもご参加いただけます！

主催・問い合わせ先
愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所
長久手キャンパス 8号棟4階
Tel: 0561-62-4111 内線2498
E-Mail: igws@asu.aasa.ac.jp

協賛
愛知淑徳大学健康医療科学部スポーツ・健康医科学科
愛知淑徳大学健康スポーツ教育センター

ポスター制作
愛知淑徳大学 創造表現学部創造表現学科 創作表現専攻2020年 森川直樹

のハンディの思想を含むスポーツ・ルールである。パラリンピックのスキー競技にはスタンディング・カテゴリー（立位）とシッティング・カテゴリー（座位）それぞれにクラスが設定され、タイム係数を用いて計算タイムが算出されている。「ユニバーサル・スポーツ」の可能性が広がり、障害者スポーツと一般の競技スポーツの垣根は低くなって、相互交流が可能となっている。西山先生によれば、男女のクラス分けは体重や身長、血中ヘモグロビン量等のクラス分けに並ぶ、競技上の平等を保つ工夫の一つとなるのかもしれないという。

（文責 IGWS 運営委員 渡辺 かよ子）

第2回 6月22日（金） 長久手キャンパス 「マスメディアを理解する～ スポーツ報道を 考えるために」

講師 林 香里さん
（東京大学大学院情報学環教授）



コメントーター
藤井 誠二さん
（本学非常勤講師）



連続講座第2回目は、マスメディア研究に従事しておられる東京大学大学院情報学環教授の林香里先生を講師としてお招きした。ライター通信東京支社での記者のご経験と長年にわたるご研究に基づき、メディアの内部構造とニュースの生産過程、およびニュースの内容がそれらからどのように影響を受けているのかについてご教示頂いた。講義では、ジャーナリズムの中でも、特にテレビと新聞のニュース報道に特化して、マスメディアが抱える問題の核心にユーモアと辛口のコメントも交えながら触れ、日本社会のうつし鏡となっているニュースへの理解を深めることの重要性を強調された。

林先生によれば、「ニュースを理解する」とは、与えられた情報を当たり前の如く解釈するのではなく、

当たり前ではないと捉え、そこから「なぜ?」「何で?」という気づきを持つことでもあるという。その気づきからマスメディアへの批判を繰り返すのではなく、いまの社会を少しでもより良い場所にするために改善すべき点について、社会に声を上げ続ける努力を惜しんではいけないと一貫して主張された。

講義の前半では、世界における日本のジェンダーギャップ指数114位（世界経済フォーラムによる2017年データ）という現状は、国内の放送局と新聞社の内部構成も反映しているとの説明がなされた。具体的な数字で見ると、放送局における全職員に占める女性の割合は、NHKは14.5%（2012年、『総合ジャーナリズム研究』内〈女性とメディア〉動向レポート）、民放

は21.1% (2010年、日本民間放送年鑑)。管理職・専門職および全役付従業員に占める女性の割合となると、NHK4.4% (2012年、同)、民放では12.2% (2010年、同)の低さである。また、新聞社の女性記者の割合は19.4% (2017年、日本新聞協会)。男女の賃金格差も当然のことながら起こっており、これらの数字から、ジャーナリズムの世界は、男女のアンバランスが顕著な男性社会の職業であることが読み取れる。そのアンバランスを生んでいる要因は、現場の過酷な労働時間と環境である。しかし、林先生ご自身の新聞記者としてのご経験から、この労働環境は調整可能であり、女性にとって働きやすい職場になり得るということであった。

講義の後半は、先述のマスメディアの内部構造が発信されるニュースにどう影響するのかについて、「ゲートキーパー」の役割を中心に教示された。「ゲートキーパー」は、記者から上がる記事を最終的にニュースとして発信するか否かの決定権を有する。ニュースとして発信されるには、報道に値する「ニュース価値」を満たす必要があり、それは「ゲートキーパー」個人の裁量ではなく、既存の基準に沿って決定されるという。ニュース基準に影響する因子には、「ゲートキーパー」自身の価値判断に加え、組織的規則・文化および社会的制度・システムがある。とはいえ先述の統計から示される通り、トップマネジメント職であるゲートキーパーに男性の占める割合は高い。林先生によれば、男社会であるマスメディアの指針(物差し)には内面的に男性性が埋め込まれていると考えられる。同様に、組織的規則や文化にもその影響は否定できないという。社会的制度とは、マスメディアの外の世界、すなわち、ジェンダーギャップが埋まらない社会のシステムのことだ。さらに、民放では広告主の発言権は絶大である。このような現場から日々我々に向けて発信されるニュースは、男女のアンバランスのある社会全体のうつし鏡になっていると考えられる。

これは、スポーツ報道における女性アスリートの取り上げられ方にも表れている。一例として2018年に起こった日大アメフト問題と伊調馨選手のバウハラ問題は、両者の問題構造が似ているのにもかかわらず、新聞では日大アメフト問題が報道される量が圧倒的に多かった。また、女性アスリートは「ママさんバレー」

の呼び名や、選手のファッションや容姿への言及など、競技以外の属性での報道が多いのも現状である。ただ、これは世界的な傾向で、スポーツ報道では女性アスリートは完全なマイノリティなのである。

最後に、林先生は次のようにまとめられた。国家として男女平等が法律上保証されているのに、なぜジェンダーギャップは埋まらないのか。その原因に日本社会のカルチャー(風土)の問題があると考えられる。林先生によれば、これにはマスメディアの影響が大きいという。女性が社会の上層部で活躍することを良しとしない内容や女性を蔑む番組が目立つ。その根底には番組制作やニュース報道の決定権を有する職に男性の比率が高い「男社会」マスメディアの現状がある。しかし、この現状はマスメディアの在り方を変えれば改善されるほど単純ではない。マスメディアと共に情報の受け手である我々も声をあげ、内在化してしまっている男性バイアスのかかった報道価値を変え、ニュースという社会的合意を組み替えなくてはならない。マスメディアの問題ではあるが、実際のところ日本社会全体の問題であるという理解を共有できるようになることが大切だという。

講演に引き続き、コメンテーターの藤井誠二先生にもご登壇いただいた。フロアからも多数質問が寄せられ、予定の時間を超えるほどに深い議論が成された。林先生の講義は、長年の研究データを基に非常に説得力があり、それ以上に、この社会を我々一人一人の力でより良い場所にしていくミッションがあると説く林先生の強い熱意が伝わる、内容の濃いものであった。日々何気なく受け流しているマスメディアからの情報を見つめ直す、良い機会となった。

(文責 IGWS 運営委員 赤星 泰子)



第3回 7月2日(月) 長久手キャンパス 「アスリートの身体と ジェンダー」

講師 合場 敬子さん
(明治学院大学国際学部教授)



コメンテーター
石河 敦子さん
(本学非常勤講師)



連続講座の第3回目は、「アスリートの身体とジェンダー」というテーマで、明治学院大学国際学部の合場敬子教授に登壇頂きました。

まず講座の冒頭では、日刊スポーツ記事「2004年アテネ大会 野口みずき、悲願の金メダル!」を読む

時間が設けられました。さらに、プロジェクタに提示されたブラジルの水着姿の女性ビーチバレー選手の写真を踏まえ、それぞれのメディアが女性アスリートをどのような存在として表現しているのかについて、学生が意見を出しました。記事からはストイックな練習

を経て成果を得た選手としての表象、水着姿の写真からは「女性」の性を意識させる表象を捉えている等の内容が挙がりました。

スポーツする姿ではなく水着を直す瞬間を捉えた写真からは、性の表象は明らかに読み取れます。しかし、功績を称える日刊スポーツ記事においても、隠れた前提を探ることで、女性ならではのメディアの表象も浮かび上がってきます。会場先生は、Bruce(2016)のメディアの表象パターンである15のルールの様式を用い、メディアが女性アスリートをどのように表象しているか、1つ1つ読み解いて下さいました。15のルールには、男女の差異に着目したもの (9つ)、男女の類似性に着目したもの (4つ)、行為遂行性が反映されたもの (2つ) があります。

例えば「異性愛の強制／適切な女らしさ」として、野口選手の記事には「結婚を前提に…」や「小さな…」と形容する記述が複数あります。これらは男女の差異に着目した表現で、未だに存在しているものです。一方で、男性と同じように女性アスリートも競技中の姿を表象する例を挙げ、記事で採用されている野口選手のゴールの写真自体が該当するとの説明がありました。さらに、強い身体的技能を持ち、優れた、集中した、意志の固い女性アスリートが競技での成功を求める姿として、男女の類似性に着目した表象がされています。また、女性アスリートを成功した国民として表象するルールもあり、野口選手の記事にも複数箇所見受けられました。このように、1つの記事の中にも、男女の差異とともに、類似性に着目した表現が、混在していることが分かりました。

次に、行為遂行性が反映されたルールとして、Women Talk Sports(WTS)の活動や、デンマークの女子テニス選手キャロライン・ウォズニアッキの活動を紹介下さいました。メディアから一方的に表象されるのではなく、女性アスリートやファンは、SNSを用いることで、自らの視点を語り、それを共有することができます。キャロラインは自身の身体ヌード写真をSNSに提供し、その姿は「きれい、かつパワフル」という言説を導いていました。第三波フェミニズムの主張の一つは、アスリートであるのか、それとも女性らしさの「いずれか」を選択するのではなく、「両方」を選択するような言説空間を作る傾向を持っているそうです。ただしこの言説はすべての人に開かれている

わけではなく、白人であること、異性愛を前提としていること等、限定的な理想の女性らしさである場合先生は指摘しています。

最後に、女性アスリート自身が身体活動で得ているもの、日常生活に影響を与えるものは何か?について、女子プロレスラーを例に考察した場合先生のご研究を紹介下さいました。女性たちは身体活動に参加することによって、自分の身体を強く、能力があると見なし、自分自身を有能だと捉え、自己の身体と結びつく感覚を得られます。それは重たいものを運べるという現実的な恩恵だけでなく、心理的な強さにもつながり、女性のエンパワメントになるのではないかと分析していました。エンパワメントとは、本来持っている力を十分に発揮できるような力を獲得する過程とされています。女子プロレスラーは、身体的エンパワメントをしている女性と捉えることができ、彼女らの身体への自信を獲得する過程は、日本社会における自信を獲得できない女性たちへ多くの可能性を示唆するものであるとしていました。

最後は、本学非常勤講師である石河敦子先生より、主体的に行うことで何かを変えていくという視点を含む「行為遂行性」という用語に触れながら、コメントを頂きました。本講座が、マスメディアからインタラクティブメディアへの変化に伴い、女性達が女性アスリートではなく、スポーツについて語る、主体的なエージェントになれるという勇気を頂けるものであったとして、まとめて下さいました。

2020年東京オリンピックに向けて増加していくアスリートの報道に対して、どのように視聴すべきか、どのように語り合うべきか、今後の私達に向けて、本講座の内容は大変示唆に富むものでした。

(文責 IGWS 運営委員 佐藤 朝美)



7月13日(金) 星が丘キャンパス

特別講演会

**「性的マイノリティの
これまでとこれから」**

講師 マーガレットさん
(ドラッグクイーン)



マーガレットさんは、日本を代表するドラッグクイーンのおひとり。ドラッグクイーンとしての活動のほか、編集者、ライター、メイクアップアーティストなど、多方面で活躍されています。現在は東京・新宿で、ホモセクシュアルを中心とした多様な性とセクシュア

リティに関する書籍を多数揃えたブックカフェ「オカマルト」を運営されるなど、性的マイノリティの歴史の変遷を伝えることにも力を注いでいらっしゃることでした。

講演会では「ドラッグクイーン」の言葉の意味や近

年の活躍にふれ、ドラッグクイーンには「ジェンダーに関する社会規範を誇張・風刺し、人々の思い込みやバイアスを攪乱・問い返す」意義もあるのだと語られました。また、ご自身の幼少期からの体験をもとに、ジェンダー規範の押しつけがいかに関わる個人の尊厳を傷つけるかというお話や、一人ひとりの違いを認め合うことで、自分も他者も尊重できる社会になるのではという問いかけをされました。映画を題材にして世代間の価値観の異なりについてもふれられるなど、さまざまな視点からのお話に、多くのことを学び、気づく時間となりました。

以下に、講演会に参加した学生二人の感想文をご紹介します。



学生感想文

舘野 健吾

私はジェンダー・女性学研究所主催特別講演会「性的マイノリティのこれまでとこれから」に参加した。そこで、ドラッグクイーンのマーガレットさんのお話を聞いた。

マーガレットさんは、私にとって初めてお会いするドラッグクイーンだった。そのため、私はマーガレットさんの入場の瞬間からドキドキしていた。会場に表れたのは、緑、黄色、白を基調としたド派手な衣装を着て、非常に高いヒールを履いたインパクトのある人だった。その時、私は初めて見るドラッグクイーンという存在に開いた口が塞がらない気持ちだった。それと同時に、一体どのような話をしてくれるのか楽しみになった。

マーガレットさんのお話によって、私は今まで知らなかったドラッグクイーンという世界の一部を知ることができた。そもそもドラッグクイーンとは、簡単に言うと、異性装でパフォーマンスをするゲイ男性のことである。ドラッグクイーンは皆、マーガレットさん

同様にド派手な異性装をしている。私は今まで「ドラッグクイーンは女性に憧れていて、女性になりたいと考えているのだろう」とか「どうしてドラッグクイーンはド派手な格好をしているのか」と思っていた。マーガレットさんによると、「女性の格好をしているからといって女性になりたいというわけではなく、男性が女性を演じることに意味がある。ド派手な格好をし、過剰な女性性を表すことで、社会が押し付けてくる性役割をかく乱し破壊するという意味がある」のだそうだ。そのとき、私は今までドラッグクイーンについて自分が間違った認識をしていたことに気付くことができた。また、ドラッグクイーンがどのような考えで異性装をしているかを知ることができた。

私はこの講演に参加して良かったと思う。実際のドラッグクイーンに会えたからこそ気づけたことがあるからだ。また、実際に会わないとわからないこともあるのだと思う。

(交流文化学部交流文化学科2年)

前田 彩

今回、講師の方の人生経験を聞くことで、何故今の日本人が「LGBT＝他人事」という考え方が強いのかに気づくことが出来ました。きっかけは講師の方が「幼少期に手塚治虫のマンガ『リボンの騎士』の、異性装をする主人公が妬ましかった」と仰っていたことです。

講演後に、私も自分の幼少期について振り返りました。私は、大学に入るまでLGBTという言葉は知っていたものの、それが社会問題になっている理由や、当事者が背負っている苦しみは知りませんでした。12年間教育を受けてきたのに、LGBTについて、ほとんど何も知らなかったのです。LGBTに対する知識が何もないにも関わらず、LGBT問題は解決すべき大きな問題だという意識を持つことはとても難しいことです。このことから、LGBT問題がなかなか改善しない理由の一つに、学校教育の遅れがあるのではないかと思いました。現に、ジェンダー・女性学研究所を設置している愛知淑徳大学でも、ジェンダーやセクシュアリティに関する授業は選択制です。

そしてこの「LGBT教育」の遅れは、女性への偏見や、日本の痴漢問題やセクハラ問題が解決しないことにも繋がっていると思います。日本には未だに「女性性は性的なことに消極的だ」という偏見が根強く残っています。また、SNSでは「痴漢はされる女側の問題である」という暴論や、「セクハラが嫌ならその場で言えばいいのに」という一方的な意見も見かけます。一見、人の考え方の差異による問題のように見えますが、そもそも問題を正しく理解するための知識を持っていないというところに原因があると思うのです。

講師の方が仰っていた「ゲイだということに罪悪感を持たず、自分らしく生きる」ためには、性的マイノリティの当事者が自分自身に対する偏見を内在化しないよう、当事者以外の人々もLGBTについての知識を得て、問題への関心を持つことが大切だと思います。今の日本の教育について、危機感を覚えるきっかけになった講演会でした。

(ビジネス学部ビジネス学科1年)



男性の家事・育児参画



朝倉 邦博

浜松市の男女共同参画推進のための情報誌「ハーモニー」NO.24 (2018年2月発行)では、3つのテーマが取り上げられています。「男女共同参画の視点から考える防災」、「DVドメスティック・バイオレンスって何?」そして「男性の家事・育児参画」。男性の家事・育児参画特集を見てみると、見出しで「日本男性も世界レベルの家事メンになろう!」とあり、「6歳未満の子供を持つ夫の家事・育児時間は、1日当たり67分(うち育児の時間は39分)となっており、先進国中最低の水準にとどまっています。国では2020年に男性の家事・育児時間を150分に増やすことを目標にしています」と書かれています。

わたしが愛知淑徳大学に入学したのは1996年。男女共学化の2年目になります。世の中であたり前と思われることに「なぜ?」を問いたです。学問「社会学」への興味と、一人暮らしがしたい!の2点から志望校・学部を選んだので、入学してから言われる事のあった「女子大でしょ?」「女の子好きだから?」にもあまりピンと来ませんでした。むしろ小・中・高と共学でずっと来たので、わたしは「男女共に」の学びの場しか知りませんでした。学生時代の思い出はアルバイト、図書館、学食です。居酒屋でのアルバイトに夢中になりすぎて単位が危ない時期もありましたが、好奇心を満たす術がないかなと図書館へ。話し相手はいないかなと学食へ顔を出す日々でした。大学側もそんなフラフラしている学生に対しても、締め付けるような事はなく自分のペースで、そして自分で決めて歩ませてくれました。

当時、学食で会うと話をする女装の先輩がいました。わたしがペラペラ話す雑談をニコニコと相槌を打ちながらいつも聞いてくれる彼?彼女?にとっても、愛知淑徳大学はきっと「自分らしく」いられる居心地の良い場所だったのではないかと、近年のLGBTに関する報道を見ながら思います。

わたしがジェンダーを意識し始めたのは大学4年生の就職活動がきっかけでした。わたしの中学校の生徒会長は女子でした。小・中・高・大でも成績トップは真面目で優秀な女子だった印象があります。1999年、長めに伸ばした髪をリクルートカットにしたわたしの周りでも、女子学生の就職活動は男子学生にも増して困難を極めていました。わたしたちが就職をした2000年の大卒求人倍率は0.99%。同級生女子学生の悔し涙も見ました。

その後わたしも地元の書店に何とか就職、時代の波に乗って「3年で辞める若者」、「非正規職員」を20代で経験しましたが、当時のわたしを悩ませたのが「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という「固定的性別役割分担意識」のプレッシャーです。結婚に関する話題、「仕事が嫌だから早く結婚して辞めたい」、「男な

んだからもっと稼がなきゃ」、「35年住宅ローン」という「大人の男ならこうあるべき」という周りからの声ならびに自分のそうあらねばという思いこみ。恋愛は楽しいけれど結婚はしたくない、できない。…結婚生活を経済的に成り立たせる自信がありませんでした。

そんな私の転機が、特定非営利活動法人浜松男女共同参画推進協会への転職です。浜松市の男女共同参画推進事業(啓発・相談・情報・団体育成支援)を担い、男女共同参画ならびに文化芸術活動の拠点施設である浜松市男女共同参画・文化芸術活動推進センターの管理・運営を担当する法人です。年間約140万人が利用する館の管理・運営を担当する事の大変さはありますが、業務の達成感も感じられる充実した10年でありました。今は施設の館長を務めています。男女共同参画の事業に関わる事で、「夫婦共働きで歩いていけばいいじゃないか」と思えるようになり、結婚も出来ました。

冒頭の「男性の家事・育児参画」の話題に戻ります。妻が妊娠しました。平成27年6月に閣議決定された「日本再興戦略2015」においても、2020年に男性の育児休業取得率13%の目標が明記されています。自分が「イクメン」になれるのか?きちんと仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)を実現出来るのか?不安はありますが大丈夫!わたしの職場には、男女共同参画社会の実現を目指して活動してきた女性、企業経験豊富な定年シニア男性、就職氷河期に悔し涙を流したであろう女性、わたしの息子でもおかしくない大学生の仲間達がいます。わたしは職場の仲間と相談しながら「イクメン」を目指します。

1999年度現代社会学部現代社会学科卒業
浜松市男女共同参画・文化芸術活動推進センター(あいホール)館長



〈特定非営利活動法人浜松男女共同参画推進協会が作成した、ワーク・ライフ・バランスのイラスト〉

ユニークな子どもたちを 探して

エッセイ



村上 泰介

みなさんは愛知県児童総合センターをご存知でしょうか。同施設は大型児童館（A型）に分類される施設で、研修施設のほか展示室やギャラリーなどを備えるのが特徴です。わたしは同施設で2007年に作品展示をしたのをきっかけに、子どもたちに向けたメディアを活用した表現の研究と制作をはじめました。この施設を通じた研究と制作を通して、わたしの子どもたちへの見方がどのように変化したのかをお伝えしたいと思います。

2007年、わたしが子どもたちに向けたメディアを活用した作品を制作したのは、「エキゾチック～メディアセレクトの感覚ツアー」という展示会の出展依頼をお受けして作品を制作してからのことです。メディアセレクトは、1989年から5回開催された「名古屋国際ビエンナーレ ARTEC（アーテック）」を継続・発展させた展示会で、名古屋港の倉庫群などで様々なアーティストの作品を紹介していました。当時のわたしは子どもに向けた作品づくりの経験が無く、手探りで制作を続け、なんとかかたちにして展示をしたのでした。制作した作品は参加型の作品であったので、わたしは展示会場に説明員として滞在し、わたしの作品を体験する子どもたちの様子を間近に見る機会を持つことができました。子どもたちは、わたしの思いもよらないような質問をしてきたり、作品の遊び方が多様であったり、展示したわたし自身に多くの驚きを与えてくれました。

展示した作品自体は好評で、この展示経験が、わたしが子ども向けの作品を作り続けるきっかけとなりました。その後、フランスのパリ市郊外にあるイッシー市に設立されたメディアアートセンター（小中学校が同じ施設内で活動している珍しい施設）での展示なども経験しました。こうした展示経験を通して、わたしの中にはある思いが芽生えて来ました。わたしの作品を子どもたちの日常で身近に体験して欲しいという思いです。そこで、わたしは愛知県内の幼稚園や保育園の遊びのプログラムとして、わたしの作品を採用して貰えないかと考えて、各施設を訪ね歩くことにしたのです。しかし、そこでの反応は良いものではありませんでした。幼稚園や保育園では、既に様々な遊びや教育のプログラムが用意されており、当時は珍しかったメディアとアートを融合させた作品を採用してくれそうな施設は見つからなかったのです。（実はこのとき、ある幼稚園の園長先生から「難しい子どもが増えているから、あなたのような変わった研究は、その子たちには受け入れられるかもしれない。」と暗示的なことばをかけていただきました。ここではお話しできませんが、この言葉がわたしを、「発達障がいとメディアアート」の研究へと向かわせてくれたのでした。）美術館やアートセンターなどの非日常的な場所での子ども作品の展示に疑問を抱い

ていた当時のわたしは、子ども向けの作品制作への意欲を失ってしまったのでした。2011年のことでした。

2012年、わたしの私生活にある変化が起きました。子どもを授かったのです。生まれた子どもと育児の関係は唯一無二のものであることを思い知らされました。世の中に多く存在する育児の先達が残してくれた情報は、時には役に立ちますが、やはり目の前の子どもと、わたしの関係は独自のものであり、子どものユニークさに圧倒される毎日を送ることになりました。子どものユニークさを目の当たりにして、以前のわたしは、どこか漠然とした「イメージとしての子どもたち」を対象として作品を作っていたことに気づかされました。

2016年、かつて展示会企画に参加させていただいていた愛知県児童総合センターから作品展示の依頼が舞い込みました。新しい作品は用意できなかったのですが、数年ぶりに子どもに向けた展示をしてみても感じたことがあります。それまでは、どこか異質な外部として子どもを捉えていたのでしょうか、「遊ばせなくては」、「感じさせなくては」、という気負いがわたしにはあったように思うのです。しかし、数年ぶりの展示で、わたしは、わたしの作品を通して、ただ子どもたちと一緒に遊んでみて楽しいと感じるようになっていたのです。それは、わたしの息子が側にいて一緒に作品を遊ぶようになった影響が少なくないと思います。自分自身の作った作品をようやく子どもの目線で体験できたような気がしたのです。

2018年現在、愛知県児童総合センターから新しい依頼がよせられました。「メディア実験室」と名付けられた企画です。この企画には3大学が制作で参加し、1大学がキュレーションを担います。そして、以前より格段に浸透した高度情報化社会における子どもとメディアの関係を3年間の研究と制作、そして展示で考察していこうというものです。この企画に参加するにあたって、わたしは6歳になったばかりの息子と一緒に作品を制作しようと考えたのです。最近よく採用されているユーザー参加型の開発に似た発想ではあるのですが、それよりも、私自身が純粋に制作のパートナーとして彼が必要だったので。彼から多くのことを聞かせて欲しいと考えた上での判断です。

目の前にいる「他者としての子ども」、文献などで知る「イメージとしての子ども」、そうした「子ども」の多様性を漠然と捉えるのではなく、唯一人その場にいるユニークな存在としての「子ども」を捉えるための道標を与えてくれた息子に感謝しつつ、新しい作品を息子と共に制作し、「ユニークな子どもたち」と作品を共に楽しみたいと思ったのでした。

（本学創造表現学部准教授）

第36回定例セミナーのお知らせ

**多様な人材・多様な働き方が、
会社と社会のステキな未来をつくる！**

講師 下方 敬子さん（株式会社デンソー 常務役員）

日時・場所 2018年11月20日(火) 13:30-15:00 星が丘キャンパス

*今回は、企業が実践するジェンダー平等/ダイバーシティの取り組みについて伺います。詳細については後日、チラシ、研究所ホームページ等にて告知いたします。広く、関心のある皆さまのご参加をお待ちしております。

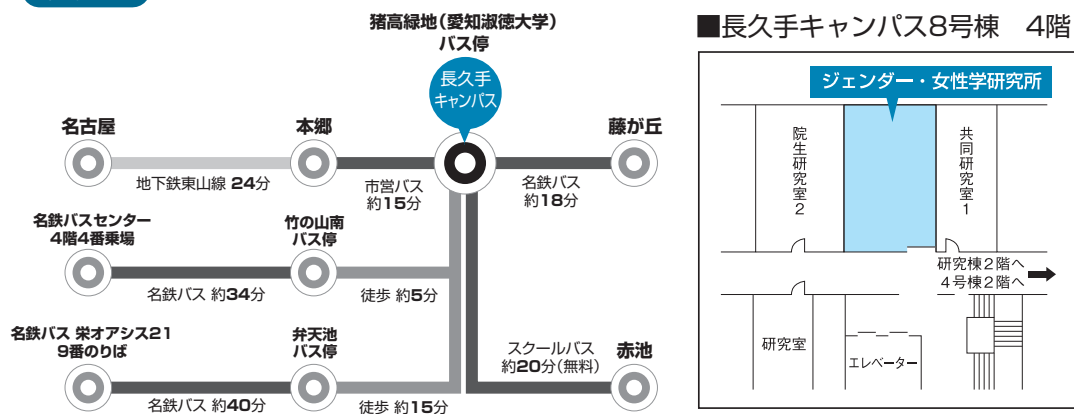
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

開室日 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階エレベーター前

案内図



編集後記

9月1日に「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習 第2回成果発表公演」を行いました。この授業は、演劇をととしてジェンダー/ダイバーシティを学ぶユニークな科目として2017年度に開講し、今年も25名の履修生が演劇の制作と公演にチャレンジしました。公演では、学生たちの持つポテンシャルをさまざまに実感するとともに、ジェンダーの学びの可能性も感じることができました。詳細は、次号のニュースレターにてご報告いたします。どうぞお楽しみに！
(中村奈津子)

ASU・IGWS2018年度

運営委員

渡辺かよ子(所長兼) 平林美都子 佐藤朝美
坂田陽子(前期) 高橋昇(後期) 小倉史(前期)
角田達朗(後期) 前田恵子 小野美和 川上綾
藤木美江 赤星泰子(前期) 金南咲季(後期)

事務担当

中村奈津子